

保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(四)

記録

田村 薫

菊池ふじの

土屋

とく編

一号記載

第一章 幼稚園

第一節 幼稚園の目的 第二節 学齡前の教育 第三節 保育の意義

第二章 保育方法の原理

一、自発性 二、具体性——幼児生活の特色と生活原理

二号記載

保育方法の原理 つづき

### 第三章 保育法の原則

一、間接（教育）の原則 二、相互教育の原則 三、共鳴の原則

四、生活に依る誘導の原則

#### 三号記載

第四章 保育方案 第一 保育項目 第二 仕組み

第五章 保育項目

一、製作

表現とは、その活動の結果が、或る形をそこに現して来る事である。これも生命の一つの発露ではあるが、この表現活動の中にも、自身自身を以てする表現と、物に表し来る表現とがある。自分を以てするにも、言葉で以てするドラマや、音楽、話、語らい等がある。内面的のものを表す為のものである。

表現とは、必ずしも人に伝える事をのみしない。自分の中のものが外にでて、何かまとまりのあるものにし度い。人に伝える前に内面的のものが自分自身にわかるのである。ここに伝達と違った真の意味の満足がある。自

分の芸が身にしてみる。たまらなくなる。

伝達の目的にあらずして、自分の身で満足しているのが、幼児の自己への表現である。

自己への表現と云う事は、とりとめのない事である。

だから客観的行程を経て、改めて自己満足を得る。

例えば、自身の心の中にあるものを、一度形に現して

見、それを改めて感じて自己満足を得る。これは実物、必要に迫られてなすものではなく、美的なのである。

必要と云う感じを置かず物を作る為には、普通の誘導は、課業的、練習的、稽古的なものである。併しこれ

は生活的でなく方法的である。そこへ芸術的と云う事が考えられる。

### 「生活的誘導」

#### 一、芸術的誘導

イ、子供には、芸術的製作衝動と云うものがある。子供にこれが湧いて来るのを、待っているのである。そして、この機に応じれば、これこそ最も純粹な芸術的誘導である。

昔は、課業的、方法的誘導の無理、不自然な方法があったので反動として出て来た。課業的、教育的誘導の無理を除いたのが、この方法であるが手をこまねいて見ているのみではいけない。こちらから誘導せねばならぬ。

ロ、それには、材料、道具を豊かに供する事である。人は製作衝動が内から湧くとは云うものの、物に誘われてやると云う事が多い。

物に誘われて作ると云う事は、人間生活中の大切な

ものである。必要に迫られている場合は違ふ。幼児の生活の中に、豊かに材料、道具を備えて置けば、自然にこの衝動が起こるのである。

予め備えておくと云うのが幼稚園である。

ハ、が、もう一つ、製作を見せて誘導する。

製作に依る誘導である。

a、その中の一つは、製作せられた物である。子供は、それを見て衝動に駆られる。

b、他の一つは、製作と云う生活を見せる。人が製作しつつある所を子供に見せる。

#### 二、産業的誘導

作ると云う事が、その子供の心の必要から生まれて来るもの。併し一般世間の必要とも異なり、又、どうにでも生きて行かれぬと云うものでもないが、子供自身としては必要感を感じる。自分の心の中のものを投げ出して眺め直してみる。必要感を投げ出したものが目的である。

目的とは、外にあるものでない自分が必要と感じたそれである。

産業的製作は、自己の必要の為に、又、目的の為に作るものと云いうる。

子供に作り度いと思うと同時に、作らねばならないと云う様な、感じを起こさせるのが、この誘導法である。

併し、自己以外のものに結びついている様な必要ではない。(例えば先生の命令、しないと叱られる)

課業的のもの多くは斯様なものである。自己の感じた純粹な必要感が動機なのである。

実際に於ける、この様な誘導とは、

#### 〔例一〕

人形を子供に与える。子供は、その人形の為に種々のものを作り度くなる。その場合作らねばならないと云う程ではないが、作ってやり度いと思う人情、やさしみと云う様な気持ち働くのである。

この場合、目的と云うハッキリしたものを、投げ出しているのではないが、只、自己の必要感で作るのであ

る。

故に半ばは芸術的と言い得る。が、この人形が、もし共同のものであった時には、この情味は湧かぬであろう。親身に世話する事もなからう。

一人に一つずつの人形を与えてやれば、子供は親身に思い、人形を見ては、ほのかな必要を感じて色々作ってやり度くなる。そこで人形を扱わせつつ、製作をするとう誘導が出来る。

人形中心保育である。が、製作に都合の良い人形を与えるが良い。(例えば、本当の大きさ、裸のままである)等)

#### 〔例二〕

先ず、玩具屋、果物屋を作るのだと言って、目的を明らかにして、その目的を目指して、色々作らねばならないと云う様な必要感を感じさせる。Project Method 目的を本体とし、目的を目指して次から次へと作って行くのである。

之は、芸術的誘導に対して云うのでなく、子供に目的

等を少しも明かさず、ただ練習的、課業的、技巧的であった従来の製作に対して言い得るのである。

但しこの場合、自分一人ではなく他の者とも一般共通した目的であるべきで、いわば社会的なるべきである。

故に他人が見ても「あれ」と合点がいかななくては。但し之は、前者と比せば、要求が多いのである。

幼稚園は理論に於いてはプロジェクトにされるべきではあるが、実際に於いては目的と云うより、完成さされてからの遊びを頭に浮かばせてやらせるべきものである。

斯様にして製作を生活に入れていく様にするが、この事は、製作者の態度如何によるものである。併し、又、製作者ばかりの態度のみでなく、作られたものが、そこに出て来る。即ち作品である。

### 産業的誘導の保育上の価値

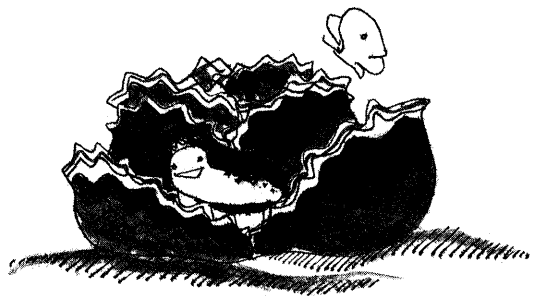
#### 1、態度に於いては生活的である事

この産業的製作が幼稚園で必要な事は、生活的である

という事にある。

2、作品に於いては（その差異、効果、価値）生活の必要から作られたものだから、象徴的では役に立たぬ。故に作品は具体的である。

形だけ、見掛けだけの作品であってはならない。その形は実体的であり、且つ子供の持つ觀念に沿ってい



る。

回る独楽、かぶれる帽子、めぐる風車でなくてはならぬ。保育とは先々にまで考え及ぼすのでなく、その場の生活に入れていくものである。

分解的、練習的の結果、技巧に於いて見かけによって、如何に立派なものが出来たとしても

実用に供せぬとあれば、具体的作品とはいわれぬ。

〔例〕 「ここに木の実が二十もあります。手に持っても、こぼすといけない。ちり紙に包んでも破れそうです。」こう言った場合、子供は「よし破れない丈夫な袋を作ってやろう」と言うだろう。出来た袋は、貼り方に於いて、切り方に於いての技巧は、かえり見られていないけれど、ただ底の取れぬ木の実の二十が大丈夫は入る袋なのである。

こうして産業的誘導をなし具体的作品が出来るであろう。作品の見掛け、外形を主とするのは、象徴的。それが実用にさるか、又は役立つと云うのは具体的作品なのである。

斯様に作品に、具体的「味」を持たせる事、之が誘導の主旨である。

外形、見かけ製作に対し、之を実体・具体製作と云う。之は実物と寸分違わず（勿論出来る事ではないが）、作ると云うのでなくその物の本義、観念等と入り入れて製作されれば満足なのである。

#### ◎此の誘導の教育全体に於ける意義

更に大きな問題としては、目的を以って作ると云う事に依って、目的ある生活の訓練、教育が出来るのである。

人間生活を大きく三つに分ければ、

- 1、は命令を受けて機械的に動いている生活
- 2、は自分でやっているが、ゆき当たりばったりの気まぐれ生活
- 3、は目的生活である。

子供は内部の衝動や、外部の環境に動かせられるから、気まぐれである。故にきびしい目的生活は、不可能

である。

併し、その生活の発動に於いて、目的的であると云う事は、幼児の遊びに見受けられるところである。発動に於いて、そうであつても、結果に於いて必ずしもそうでないのが常であつて、そこで、遊びと云うものの気楽さが存するとも云いうる。

その様な生活に、結果に於いて目的なる様に指導を与えれば、この目的生活を訓練する事ができる。

製作は、この点に於いて最も効果的なものである。

以上は製作そのものに於いてでなく、教育と云う全体的なものに於ける意義である。

目的生活に於いて、初めて人生の意義が生れる。

目的生活に於いて計画が生まれ、完成の悦びが生まれ、自己が成長していくのである。人生陶冶である。

幼児にこの生活をさせる場合、目的も、計画も、生活も、具体的であると云う事に価値がある。故にこの誘導は、生活教育に有効なのである。

目的と云うものを中心に動いていく保育こそ有意義。

○如何にして指導していくべきか。

1、子供自身の有する目的的生活興味を、この製作に於いて完成させてやる。

大抵のものが先生と生徒との共同なのである。勿論生活主体は子供であるが。

幼稚園に於いては、子供の単独製作の成績を重視する事をなすべきでない。子供を手伝ってやったり、子供に手伝わせたりしていく。

何を手伝っていくのであろうか。何故技術を手伝うのだろうか。もし製作が技術だけのものではなから、手伝うべきでない。が、手伝う事によって子供の目的実現を計ってやるのである。技術的のみに効果を求めるのではない。折角子供のたて得たプランを實現させてやるのである。

併し、子供は一人で作つた事にしてしまふ程、先生は子供に手伝ってやると云う感じを抱かせぬのである。

子供が作ろうとしたものを、作り得た悦びを共に悦んでやると云うのが主体である。

子供の作りつつあるそのものを助けるのでなく、作ろうとする心持ちを手伝ってやる気持ち。目的貫徹を共に計ってやるのである。

子供は何度目的を立てても、その目的を果たした事のない様な状態にあれば、子供は目的を立てる事もせず、自己の生活を捨ててしまふ。too much kindであってはならぬ。手伝い方が容易でないのである。

又、何処に手を入れてやるべきだろうか。

子供の製作を手伝ってやるが、その狙いを誤っている事がある。例えば子供の生活の目的興味にあまり象徴的に当たりすぎる。又、子供の個性に依っても骨は違つて来、一人の中も又、時に依つて違つているのである。

## 2、目的を出させる様に誘導する事

芸術衝動を起こさす為には、三通りあった。産業生活に於いても目的を出させる。

大別すると

① その子の環境的影響に依つて、目的的になりかけているものを、はっきりした目的にまで誘導する。

例えば、町を歩くと大売り出しがあり、子供は面白く感じ、やってみたいものだと思ふ。目的になりかけている。このなりかけを、はっきりさせてやる。

保育法に於ける季節年中行事も、この事に関係している。興味を目的に置きかえてやるのである。

② 子供をして必要に遭遇せしめる事。

子供の必要感を誘導する事。

部屋の隅に人形がいる。そこで先生が「皆さんは沢山着ているから暖かいけれど、お人形さんは寒いでしょに」といったとする。子供は、そこで必要感が起こる。

「○○さんは、お休みだけど淋しいでしょうね」と

言えば、子供は葉書を作らねばと必要を感じる。

必要感を促す事、刺激する事は難しい。併し、何時完成するかと云う限度を持たせねば目的とは云えない。



い。

自己が自己に命ずる責任感を呪わしく思わない程度に感じていなければならぬ。

全部の子供が全部同時に同じ目的を持っているとは限らない。併し多勢の中の何人かが必要の切迫を感じると、それに動かされて知らず知らず必要感が発生して来る。

以上の様な偶発的なものばかりでなく、先生が或る程度まで手を入れておいて、後の充実、完成の必要を子供に感じさせて作らせると云う事が出来る。後を残しておくのである。

そして先生を手伝うと云う様な形に迄してしまふ。手を出さずにはいられないと云う感じを抱かせる。

象徴的の目的を出したのでは、子供にしっくり来ない。具体的に子供の目の前に出してやる。そして、それからそれへと必要感を促してやるのである。

以上の様にして目的生活、及び製作に対する教育をなしていく。製作して何か出来る。出来上がれば成績的見

地から見度くもなるし、又、子供もそう気にかける事である。

併し、ただ如何に巧みに出来ていても、その目的の一義、本義に叶っていなければならぬのである。

子供がトンネルを作る。見たところ如何にもトンネル的である。そこへ開通式とか云った末端的の事までするであろう。併し、汽車の通れるトンネルでなければ、何でもなくなる。そこで通れる様なトンネルに改めさす。余り厳しくすると、子供には泣き度い気持ちである。

故に裏から行って子供に満足を与える。即ち通れる様な汽車を探して来て通させてやり度い。

実際として、トンネルを単に作っている子供は、どの汽車を通そうと迄は考えていないだろう。これに対しての先生の要件としては、先生は汽車を持って来てあげるのである。子供がそこまで考えていなかった目的を、はっきりと本物にしてやるのである。子供がトンネルだけを考えて、汽車の事ははっきりと意識していなかったものを、その本義、本質に基づいて子供の目的を内面的に

浮かび上がらせてやる。

実は持っていた目的を先生に依って、はっきりと浮かび出して貰い、目的生活をより目的生活らしいものにしてもらったと云う感じを起こさせてやる。

子供の目的を認めてやる知己でなければならぬ。子供の側にいる時、子供達に教えると云う事よりも、子供の生活を心のとどかないところまで到達させてやる知己でなければならぬ。

以上の様な意義を考えると、製作と云うものが決して技能教育でなくて、生活教育に重大な関係を持っていると云う事が、うなずかれるのである。

(以上 第二学期)

## 二、観察

大正十五年に幼稚園令が定められた。

これは幼稚園令としての本質は、全く新しいものであるし、又、保母の資格、待遇も新たに定められた。

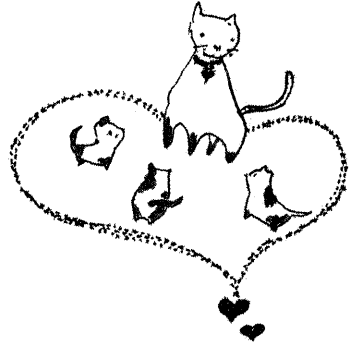
併し保育の實際に關する事に就いては、従来の幼稚園規則と大なる差は無かった。保育項目も大体同様に規則の中にあつたが、観察と云う語だけは規則の中にあげられてなかつた。新たに何故注意されたか。又、如何にして之を果たすべきかと盛んに論議せられる様になつた。又、他の保育項目とは言葉づかいの性質が異なっている。

例えば、遊戯、唱歌、談話、手技、等は生活の一つの姿であり、形であり、体をなしている名称である。

併し観察は生活のある特定なる姿、形であるよりも、生活の作用で体をなしている名称と云うよりも、動きを表しているところの名称である。

広い意味に於いて考えるならば、観察は何時、如何なる場所に於いても行われているのである。他のものは始終なしているとは云うものの、する時間は定められているものである。

而も一面より言うと、理科教授の上に於いて、古くから教育の世界に用いられているし、又、初等教育中極め



て重要なものとして用いられて来たか。日常生活の動きとしてばかりでなく、一つの特定なる生活体をなす様な意味に用いられて来た。

幼稚園の保育上の観察が、その観察（理科教授上のもの）と、どう同じであるか。又、どう違うか。新しく出て来たが故に、特に特殊化して用いてみたり、又、無意義に思ったりする傾向が出て来る様になった。

何故に保育項目の中に新たに観察を入れて来たか。

必要なものとして加えられるべき理由があるとする。従来の幼稚園に於いて何等かの欠陥があり、それを補う為に加えられたものと見なす。

(1) 幼稚園の教育の歴史的全体に於いて、フレーベルの特に幼稚園教育として力説した点は、「活動」と云う事にある。

特にその中でも、外にあらわしてゆく（とり入れてゆく活動より）即ち、作ると云う活動にあった。又、それ以前の教育が受取る（習う、おぼえる）事にのみ偏していたのが、作ると云う事によって発達してゆく事を新なる着眼点とした事は、もつとものである。

但し、フレーベル自身に於いては、受け取ると云う事も相当に含まれていたが、それより後、幼稚園は、表現活動の方にかたよる傾向を以て進んで来た。

(2) 次には、教育一般が理性本意であると云うに對し、情操の教育を重んじなければと云う事が、現代教育の重なる主張として表れた。

情操教育論は、情操教育の方法に於いて芸術教育と  
なつて来た。

この事は特に小学校教育に於いて、あの無味乾燥な  
固苦しさを柔げるに意義があつた。

幼稚園は元來、芸術的性質が豊かで、今更その新し  
い主張に急ぐ必要はないのであつたが、そこに二つの  
理由から幼稚園をして、やはり、その主張に酔わせる  
様な傾向が起つた。

二つの理由とは、互いに相反した事情である

1、幼稚園の芸術的傾向、性質も、前述の如く作ると云  
う事に重きをおいているから、同じく表現であつても  
情操的と云うよりは、工夫的、考案的、創意的であつ  
た。

現代芸術的教育論の主張に比すれば、意志的、理性  
的性質を多く持っているものである。

それに対して情操味を加えて行こうと思ふ事、更に  
幼稚園が、その理性的意志的なる事に偏していくと云  
うにないでもなかつたら、此に情操本意の芸術的教育

を加える必要のあつた事もある。

2、には、以上の様ではあるが幼稚園の先生達は、観念  
教育者に比して、或いは音楽、或いは遊戯、又、空想  
的芸術としてのお話、こういう方面に元來多くの傾向  
を持つてゐる人が多いのである。

そこへ現代教育主張として、斯様な方面の取り入れ  
が大いに進んで来たから、下地はもとよりと云う様な  
関係で、滔々として、そちらの方向に流れていく傾向  
が生じて来た。

これが、歌い、踊り、空想的眩惑美の中の童謡、童  
話に、とりとめなき美しさを漂わす幼稚園。之が一世  
を風靡する幼稚園となつたのである。

即ち全く反する反対の事情に基づいて、同様な結果  
を生んだのである。

さて以上の様な主張の、その事自身が悪いのではない。  
併し物に即し、事実には正確なる興味を向け、及び、そう  
した態度に於いて受け取つていく方の生活を發達させる  
と云う事も、ゆるがせにしてはならぬ事は尤もである。

之が所謂、情操主義芸術の波に漂わされて没却するの止むなきに至った。

而も又、フレーベル以来の創作本位と云う意味に於いて、幼稚園的なるもの、又、あの奔放自在なる情操と空想との楽園としての幼稚園的なるもの。それに対するものは、所謂知的教育であると考えられる危険が少なくな

い。

それならば、幼稚園的なるものの一つの傾きで、幼稚園そのものを殺す事になる。

情操対観念、芸術対知識でなく、あの情操本意、芸術教育の、ほしいままなる事の持つところから生ずるとりとめなき、あいまいさ、不正確、斯様なものの欠陥をその点に於いて補うとするのが、観察を呼んだ原因である。

情操本意、芸術主義的教育でないとする、すぐに観念的、知識的と云う事を考え易い。

併し、そうではなく単に、子供に知識的、観念的なる教育をせずして物に即し、事実

に正確なる興味を向けさせる態度に於いて教育する事が必要で、その為に観察が生まれたのである。

### 観察の目的

#### 一、事実感の養成、教育

之は前述の歌とか踊りとかでは、一面に云うならば、感情、気持ちの細やかさ、美しさが養われる。

及び、大まかさ、悠長さ、のびのびしたものが養われる。

この全体には必ず斯うでなければならぬと云う気持ちは少ない。

ここに於いて養われるは感情であり、又それは大まかなゆとりのあるものであるが、この二つを見ると、全体が事実から離れている生活と云う事になる。

小さい子供の心理の特徴は、非現実性ではある。彼等が現実的に生活してゆくと云う事は、子供らしくない。

併し、子供であろうとも、糸の切れた風如くゆき当たり、なすままにしてよいものではない。

も少し物に即し、事実に精密なる心様も持たしてゆかねばならぬ。

が、然し、この浮き々々した感情に対立する一つとして、知識と観念の法則に基づく思考と云う生活態度がある。この知識思考と云うものは、感情、空想に比し確かなものである。

しかし、この知識思考は、人間の心の働きとして持っており、又作り出すものであって、その点に於いては事実と離れた関係に於いて感情と同じである。

即ち、抽象的である。感情的詠歎でもなく、思想的抽象でもなく、事実そのものとしての受取り方を事実そのものに対してなす。

その場合に生ずる詠歎でもなく、思考でもなく、事実を事実としての実感、即ち事実感を観察として養おうと云う第一の主点である。

一輪の花あり。歌にすれば感情的に詠歎するのである。これは花そのものに対してでなく、花の美しさに対し、又、美しさに依って、こちらから醸し出されて来たもの

が、歌である。その花を知識的、観念的に精密に調べていく事は、如何にもその事に関して悉しい様であるが、事実そのものに則していくのではない。

故に、この二つを抽象としてしまい、物をそのものとして実感せしめる為に、子供をしてその物に直接せしめるのである。

但し物そのものとして、実感せしむるを以て目的としてそれに止まらねばならぬ。それ以上すすめては、又、抽象に戻ってしまうのである。

但し子供の想像心理に依って、童話の中に入って架空とは考えずに、実感として考える事は確か。人間は事実の中に生活しているものであるから、事実に則する実感に乏しかったならいけない。

之、観察の持つ第一目的である。

併し知識とは物に則しているのではなく、抽象なのである。故にやはり事実に則する実感を養わねばならぬのは、人間の殊に小学校の使命である。学問としてはこの抽象でよいが、人間の実際の生活には是非必要である。

事実には則して実感を感じる様にするには、何事にも実感を感じてゆく本来の能力、傾向等を小さい時から養わねばならぬ。勿論想像力、知識も必要ではあるが。この観察の目的を達成する為には、物を豊富におかねばならぬ。そして、折にふれては機会を与えてやる。知識は大したものでないが、見ると云う生活に入れてやる。事実感の経験を幼稚園に於いて与えてやる。そのものは凡て実物でなくてはならぬ。

真物に触れさせる事が何よりも大切なのである。実感を持つ事の出来る様に実感性を養うのが、観察の目的である。

実感能力を有する様になるか否かである。

1、非現実的、空想的、情緒的、芸術的、創作的生活を多分に持っている幼稚園に於いて、余りに傾かぬようにと云う為に、観察のある事も一つではある。

2、が、もっと奥底にあるものは斯様なものの対としては、すぐに抽象的なものを持って来てしまい易いから、この対抗として最も必要な観察がもってこられたのである。

る。実物であっても、それが余り使い慣れていてあるものがあるなら、実感より却って実用感が先に立ってしまうものである。

而し動植物は、所謂ながめるのである。自分との間に距離がある。故に観察の対象物となるものは、純実用物を除いた実物でなければならぬ。

小鳥を観察するに、小鳥を大切に思うからでなく、子供の之等に対する実感的態度養成が目的である。

但し、小鳥を教えるのが、主ではないけれど、一羽々に就いて、忠実に観察しなければその実感は起こるものでない。

小鳥を観察すると云う事は、実感を養う手段として重要なのである。

目的としては、実物が主ではないけれど、その手段として実感を養うには、そのものの忠実なる観察なくしては出来ないものである。

その物を物として知らずに、その物に就いてのみ知っている事がある。

前者は of (即して) で、後者は on (就いて、関して)。

多くの人は本で得た知識を有しているものである。

知識は有しているが、その事実在即しての知はない。

絵は話よりはやや実感に接近している。

観察をすると称して、真の意味の観察をしていない事がある。

それに関する知識を与えるのではない。

その事実在即しての実感性を有する事は外形に対しての真面目さを養う事なのである。

以上を心理作用で云うなれば、

前章では、忠実なる、真面目なる態度の養成であったが、心理的に云うならば、外界に対しての興味を養う事になる。

外の物に対しての興味である。我々の興味と云うものは、凡て外界の事物に引き付けられているのである。折角外界のものに引き付けられ様とする興味、外界の事物なしに過ぎたならば、それは弱まっていくのである。

又、年中同一の物に対するならば、この興味は持続しない。

又、外に向かつて興味を満たす事が出来ないなら、内に向かつて満たそうとする。

内へ向ける興味が多くなると、外に向けての興味が減じて来る。故に外界の事物を豊かに提供する事は、興味そのものを豊かに発達せしめるのである。

人生に対する興味が青年期の一寸前位にすこし覚めてしまつて、無興味時代と云うのがある。根拠のない厭世的態度を取る様になつたりする。

自殺者には死ぬ理由があるのではなく、彼の死を止めるに足る興味がないのである。

前の無興味時代に似た時代が、幼稚園の年長期から小学校の初級に起こる。

自己の発達に相当する興味に適當な満足の与えられぬ為なのである。

興味はどんどん発達するけれど、之に伴う知識、外界の事物が変わらないのであるから。



故に彼等に活発なる精神活動養成が大切である。

興味を更に心理的に考えて見る。

興味とは此方よりも向こうに対しての興味が主になっているものだが、も一つ進めて考えれば、向こうに対する注意ではないか。

興味の養われる一方、注意力が養われるのである。

注意の出来る、出来ないは本来のものであるが、外界の事物に対しての忠実性を有するか否かで差はある。

外界に対する注意能力は、話で養われるのではない。実物にひかされてのみ養われる。

以上のようにして観察すれば、将来無限の知識を受くるに役立つ心的作用を養うのである。

能力の養成、之れ観察の価値である。

——以下次号——

(川村学園短期大学)

